〈研究ノート〉

『3～6歳児の学習と発達指南』における道徳性の育成

―― 中国における就学前教育の改革に着目して ――

宮本　慧
宋　一萱
川上若奈
吉田武男

〈研究ノート〉

『3～6歳児の学習と発達指南』における道徳性の育成

―― 中国における就学前教育の改革に着目して ――

宮本　慧[*1]
宋　一萱[*2]
川上若奈[*3]
吉田武男[*4]

Ⅰ．はじめに

21世紀に入り，「OECD諸国では，新しい時代を切り拓く学校教育のあり方をめぐる研究開発と並行して，就学前の保育・教育の分野においても精力的に改革の取り組みが始まっている」という[(1)]。こうした就学前教育の改革を目指す動きは，日本にとっても決して例外ではない。しかし，たとえば日本の就学前教育の方針を示している新旧の『幼稚園教育要領』を眺めてみても，大きな改革を促しているような記述変更は見られない。特に，道徳性の育成に関しては，五つの内容領域のうち[(2)]，「人間関係」の領域において，従来とほとんど変わることなく，次のような記述が2017年版の『幼稚園教育要領』に示されているだけである。

「道徳性の芽生えを培うに当たっては，基本的な生活習慣の形成を図るとともに，幼児が他の幼児との関わりの中で他人の存在に気付き，相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにし，また，自然や身近な動植物が親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること。特に，人に対する信頼感や思いやりの気持ちは，葛藤やつまずきをも体験し，それらを乗り越えることにより次第に芽生えてくることに配慮すること。」[(3)]

さらに，道徳性の育成に関連する内容として規範意識まで広げて見ると，同じように「人間関係」の領域において従来とほとんど変わることなく，次のような記述が新『幼稚園教育要領』に見られる。

「集団の生活を通して，幼児が人との関わりを深め，規範意識の芽生えが培われることを考慮し，幼児が教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で，互いに思いを主張し，折り合いを付ける体験をし，きまりの必要性などに気付き，自分の気持ちを調整する力が育つようにすること。」[(4)]

このように我が国では，新『幼稚園教育要領』を眺めてみても，道徳性の育成に関して，気持ちや心情に執着する心理主義的な傾向が旧『幼稚園教育要領』と同様に貫かれ，内容的にも道徳性や規範意識の芽生えを培うという発想からの進展があまり見られない[(5)]。

それに対して，隣国の中国では，絶対的な政治体制ということもあって，一気に精力的な改革が国ぐるみで進められているようである。その点に関しては，国立教育政策研究所の総括研究官の一見真理子は，「中国の幼児教育は，現在，国をあげてすすめる『資質教育』の基礎の段階として重要視され，再認識されている」と述べている[(6)]。

近年の中国の就学前教育政策を辿ると，2001年には，「基礎教育の改革・発展についての決定」（国务院关于基础教育改革与发展的决定）が提出され，「資質教育」（素质教育）を全面的に推進することが示される[(7)]。また同年には，教育

＊1 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 学校教育学専攻
＊2 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 教育学専攻
東北師範大学院 思想政治教育研究センター
＊3 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 学校教育学専攻
＊4 筑波大学人間系 教授

部より「幼児園教育指導綱要（幼儿园教育指导纲要）（試行）」が提出され，就学前教育の内容は「健康」,「言語」,「社会」,「科学」,「芸術」の五つの領域に定められる[8]。その後，2010年には「国家中長期教育改革と発展規則綱要（国家中长期教育改革和发展规则纲要）（2010—2020年）」と「当面の就学前教育の発展に関する若干の意見（国务院关于当前发展学前教育的若干意见）」が提出され，積極的に就学前教育を発展させることが示されている[9]。

こうした一連の展開について，南部ら（2017）は，2000年代に入る時期に，就学前教育が「今後発展させなければならない教育段階として教育政策全体の中でも重視され始めた」と述べたうえで，2010年の「綱要」では，「目標がより具体的に述べられており，就学前教育の章が独立して設けられていることから，教育政策全体における就学前教育の存在感が大きくなっている」と，同年の「意見」では，引き続き幼児園の「量的拡大と質的向上について方針が示された」[10]と，指摘するように，近年の中国の就学前教育については，加速度的にその重要性が増しているという。

しかし，2010年の「意見」と「綱要」のような幼児園の教師に向けられて述べられた教育政策のようなものではなく，教師以外に保護者も含めて呼びかけ，園や家庭，さらには社会全体で就学前教育の質を向上させるために，2012年に教育部より新たに公表されたのが，本稿で検討する『３～６歳児の学習と発達指南（３～６岁儿童学习与发展指南）』（以下，『指南』と略す）である[11]。その意味で，『指南』は，中国の就学前教育にとって大きな変化を象徴するものであると言えよう。

『指南』のまえがきには，次のように述べられている。

「幼児園と家庭に科学的な保育と教育を実施するよう指導し，幼児の心身の全面的かつ調和的な発達を促進するため，『３～６歳児の学習と発達指南』（以下『指南』と略す）を策定する」。

そのうえでさらに，「幼児園の教師と保護者が３～６歳の幼児の学習と発達の基本的な法則と特徴を理解するよう援助し…（中略）…科学的な保育と教育を実施し，幼児が幸せで有意義な幼年時代を過ごせるようにする」と述べられている。

このような『指南』に対して，中国国内では中国ユニセフ協会（联合国儿童基金会驻华办事处）の教育長である孟宁（2012）は，『指南』が「ますます多くの児童に良い効果をもたらすだろう」と高く評価したうえで[12]，『指南』の内容が中国ユニセフ協会のホームページに掲載されている[13]。また，人民教育出版社の王迎兰（2014）は，2001年に提出された「幼s児園教育指導綱要（試行）」が「幼児それ自体の発達への関わりはとても少ない」と指摘した上で，『指南』は「幼児の学習と発展の目標をまとまった体系として提出しており，幼児教育の発展に対する国家の期待を代表している」ときわめて高く評価している[14]。

日本国内では，『指南』は日本保育学会でも注目され，そのホームページに掲載されている。「国際交流委員会」のページでは，韓国，中国，ニュージーランド，スウェーデンにおける保育関連指針・要領の解説が掲示されており，一見ら（2019）によって中国の『指南』もわかりやすく概説的に説明されている。

そこでは，「幼児園や家庭において，就学前の３～６歳児の発達段階にふさわしい教育と養育の促進と，幼児の発達の基本的特徴に対する理解を促すためのガイドラインとして定めている」と評価したうえで，その特徴として，三つの点，すなわち「教育内容を『健康』,『言語』,『社会』,『科学』,『芸術』の５領域に分け，その内容を，幼児の学習と発達における『目標』と『教育上の意見』の２点から説明している点」,「年齢段階ごとの発達水準が具体的に示されている点」,「幼児園だけでなく家庭においてどのように幼児の発達を保障するかが示されている点」が指摘されている[15]。

そこでは，一見らによって『指南』の大きな特徴は紹介されているが，あくまでもそれは全体的な概要と特徴を紹介した解説であり，五つの領域の教育内容の詳細な分析，とりわけ道徳

性の育成に関することについては詳細に分析されたものではない。

このような国内外の先行研究の限界を踏まえ，本稿の目的は，『指南』における道徳性の育成を明らかにすることである。その目的を達成するために，まず，『指南』の特徴を整理する。次に，五つの内容のうち，道徳性の育成にもっとも関係の深い「社会」の特徴を明らかにする。最後に，以上の考察を踏まえ，幼稚園教育要領と対比しながら，『指南』における道徳性の育成を明らかにするとともに，日本への示唆についても指摘する。

Ⅱ．『指南』の概要

最初に，『指南』の特徴については，その冒頭の文章を参考にしながら整理する[16]。

まず，『指南』が策定された理由について言うならば，「『国家中長期教育改革と発達規則綱要（2010－2020年）』および『当面の就学前教育の発展に関する若干の意見』を貫徹し，幼児園と家庭に科学的な保育と教育を実施するよう指導し，幼児の心身の全面的かつ調和的な発達を促進するため」であると説明されている。このことから，『指南』は2010年以降の中国の就学前教育改革を反映させて策定されたことが考えられる。

次に，『指南』の目的については，「『指南』は，幼児のその後の学習と生涯の発達を定める良好な素質の基礎を築くことを目的とし，幼児の体，知（智），徳，美の各側面の調和的な発達を促進することを中核に置いている」と述べられているように，生涯にわたる発達の基礎を養い，各側面の調和的な発達の促進が目的とされている。さらに，「『指南』は，３～６歳の各年齢の児童の学習と発達目標，および相応する教育上の提案を通して，幼稚園の教師と保護者が３～６歳の幼児の学習と発達の基本的な法則と特徴を理解するよう援助し，…（中略）…科学的な保育と教育を実施し，幼児が幸せで有意義な幼年時代を過ごせるようにする」と述べられていることに基づき，発達の段階に応じた目標が提示されている。より詳細にいえば，３～４歳，４～５歳，５～６歳の三つの発達段階について，「幼児が知るべきこと，できること，および達成できる発達レベルのこと」が示されている。

このほか，『指南』については，次の四つの側面について理解すべきであるとされている。一つ目は，「幼児の学習と発達の全体性に配慮する」ことである。より詳細にいえば，各領域や目標の間の関連を重視し，幼児の心身の全面的な発達を促進させることが説明されている。二つ目は，「幼児期の発達における個人差を尊重する」ことである。ここでは，それぞれの幼児の発達過程が一様ではないことが指摘されたうえで，幼児の個人差が十分に理解され，『指南』に示されている発達の「階段」に，自らの進度と方法で到達することが求められている。三つ目は，「幼児の学習方式と特徴を理解する」ことである。ここでは，「幼児の学習は直接的な経験に基づいており，遊びや日常生活において行われる」ことが指摘されたうえで，「苗を抜いて助長する」ような早期の知的教育は厳しく禁じられている[17]。四つ目は，「幼児の学習の質を重視する」ことである。具体的にいえば，幼児の好奇心や学習への興味，積極性，真剣さ，困難を恐れず，果敢に探求し，挑戦すること，想像と創造を楽しむことなどが，良好な学習の資質としてあげられている。また，幼児の能力の育成を無視し，単に知識と技能の学習を追求することは，近視眼的で有害であるとして否定されている。

Ⅲ．『指南』における「社会」の領域

前述したように，『指南』においては，教育内容は，「健康」「言語」「社会」「科学」「芸術」の五領域となっている。その中でも，道徳性の育成に関する内容は，日本の『幼稚園教育要領』に見られる「人間関係」の領域がないために，必然的に「社会」の領域において言及されることになる[18]。

まず，「社会」の領域の説明について表１を見てみると，「幼児の社会領域における学習と発達の過程とは，社会性が絶えず改善され，健全な人格の基礎を打ち立てる過程」とあるよう

表１　「社会」の領域の説明

幼児の社会領域における学習と発達の過程とは，社会性が絶えず改善され，健全な人格の基礎を打ち立てる過程である。人間交際と社会適応は，幼児の社会学習の主要な内容であり，社会性を発達させる基本的なルートでもある。幼児は，大人や仲間と付き合っているうちに，相手との友好的な付き合いを学ぶだけではなく，自分を認識することや，他人に応対することも学び，社会生活に適応する能力を発達させていく。良好な社会性の発達は，幼児の心身の健康とその他の各方面の発達に重要な影響を与える。 家庭，幼児園と社会は，幼児に温かく，思いやりのある，平等な家庭や集団生活の雰囲気を作るために，共に努力すべきであり，良好な親子関係，教師と児童の関係，仲間関係を築き，幼児に積極的かつ健康的な人間関係の中で安全感と信頼感を獲得させ，自信と自尊心を発展させ，良好な社会環境や文化の雰囲気の中でルールを守ることを学ばせ，基本的なアイデンティティや帰属感を形成させるべきである。 幼児の社会性は，主に日常生活や遊びにおける観察と模倣によって，知らず知らずのうちに発展していく。大人は自らの言動の模範的な役割を重視し，単純で堅苦しい説教は避けるべきである。

（『３～６岁儿童学习与发展指南』より宮本翻訳作成）

に，社会性が着目されていることに気づかされる。

実際に文章を追っていくと，次の文章は，「人間交際と社会適応は，幼児の社会学習の主要な内容であり，社会性を発達させる基本的なルートでもある」と述べられている。そこでは，主要な内容として，「人間交際」と「社会適応」という二つが構想されているが，その際にも，どちらの内容も，「社会性を発達させる基本的なルート」と見なされており，社会性が着目されている。さらに次の文章では，「幼児は，大人や仲間と付き合っているうちに，相手との友好的な付き合いを学ぶだけではなく，自分を認識することや，他人に応対することも学び，社会生活に適応する能力を発達させていく」と述べられている。ここでは社会性という用語は直接的には使用されていないものの，「社会生活に適応する能力を発達させて」という文章は，実質的に社会性の発達のことを想定したものであると考えられる。そして，次の文章では，「良好な社会性の発達は，幼児の心身の健康とその他の各方面の発達に重要な影響を与える」と述べられ，その段落が終わっているが，そこでも社会性という用語が使用されている。また，次の段落の長い文章には，社会性に関連する内容は記されていても，社会性という用語は直接的に使用されていないが，次の段落の文章には，「幼児の社会性は，主に日常生活や遊びにおける観察と模倣によって，知らず知らずのうちに発展していく」と述べられ，そこでも社会性という用語が明確に使用されている。

このように「社会」の領域の説明を見れば明らかなように，社会性という用語が繰り返し使用されている。つまり，この領域では，社会性の育成が主眼とされているのである。ただし，その際に，社会性という言葉が，我が国で言えば道徳性に当たるような意味内容も包含していることに注意されなければならない。たとえば，「大人や仲間と付き合っているうちに」，「相手との友好的な付き合い」「自分を認識すること」「他人に応対すること」だけでなく，「安全感と信頼感」「自信と自尊心」「ルールを守ること」「アイデンティティや帰属感」などという道徳的価値と呼んでよいような内容も含まれている。とりわけ，最後の文章において，「大人は自らの言動の模範的な役割を重視し，単純で堅苦しい説教は避けるべきである」と述べられている点は，まさに幼児期における道徳の指導方法の基礎基本が示されている。

次に，表２と表３に示した，社会学習の主要な内容となっている「人間交際」と「社会適応」という二つについて見ていくことにしよう[19]。

最初に，前者の「人間交際」の内容を見てみると，そこには四つの目標が掲げられている。すなわち，「人と交際したい」，「仲間と仲良くすることができる」，「自尊心，自信，自主的な表現」，「他人に関心をもち尊重する」である。そのうえで，子どもの発達期が，３歳から４歳まで，４歳から５歳まで，５歳から６歳まで，というように小さく区切られ，四つのそれぞれの目標が小さな三つの発達期毎により具体的に

表２　「人間交際」の目標

３～４歳	４～５歳	５～６歳
目標１　人と交際したい		
①他の幼児と一緒に遊びたいと思う。 ②親しい年上と一緒に活動したいと思う。	①他の幼児と一緒に遊ぶのが好きで，よく一緒に遊ぶ仲間がいる。 ②年上と話すのが好きで，年上に話したいことがある。	①自分の親友がいて，新しい友達を作るのも好きである。 ②質問があったら，他人に教えてもらいたい。 ③嬉しいことや面白いことがあったら，みんなと分かち合いたい。
目標２　仲間と仲良くすることができる		
①仲間との遊びに参加したいときは，友好的に頼むことができる。 ②大人の指導のもとで，おもちゃを奪うことなく，独占しない。 ③仲間と衝突したとき，大人の勧めに従うことができる。	①自己紹介やおもちゃ交換などの簡単な技能を用いて，仲間との遊びに参加することができる。 ②みんなが好きなものを順番に使ったり，分け合ったりすることができる。 ③仲間と衝突したとき，他人の助けで平和に解決できる。 ④活動中は，仲間の意見と提案を受け入れようとする。 ⑤弱いものいじめをしない。	①仲間を集めて自分と一緒に遊ぶことができる。 ②活動中は仲間と協力することができ，困難を一緒に克服することができる。 ③仲間と衝突したときは，自分で相談して解決することができる。 ④他人と自分の考えが，ときには違うことを知り，他人の意見を聞いたり，受け入れたりすることができ，納得できないときは，理由を説明できる。 ⑤人をいじめず，人にいじめられない。
目標３　自尊心，自信，自主的な表現		
①自分の趣味に応じて遊びや他の活動を選ぶことができる。 ②自分の良い行動や活動の成果を好む。 ③自分でできることは自分でやりたい。 ④小さな仕事を引き受けることを好む。	①自分の考えで遊びや他の活動をすることができる。 ②自分の優れている点と長所を知り，それについて満足する。 ③自分のことはできるだけ自分でやり，人に頼るのは遠慮する。 ④ある程度の難しさの活動と仕事を試してみようとする。	①積極的に活動を始めたり，活動中にアイデアを出したり，方法を考えたりすることができる。 ②良いことをしたり，成功したりしたときに，もっとうまくなりたいと思う。 ③自分のことは自分でやり，できないのは学びたいと思う。 ④積極的に仕事を引き受け，困難なことも投げ出さず，安易に助けを求めない。 ⑤他人との見方が違うとき，自分の意見を主張し，理由を説明する。
目標４　他人に関心をもち尊重する		
①年長者の話をよく聞いて，その要求を聞き入れることができる。 ②身近な人が病気になったり落ち込んだりしたときに同情を示す。 ③注意の下，他人に迷惑をかけないようにする。	①自分の要求や考えを丁寧に年上に伝えることができる。 ②他人の情緒に注意し，関心をもち，思いやりを示すことができる。 ③両親の職業を知り，親が自分を育てるために苦労していることが理解できる。	①礼儀正しく人と付き合うことができる。 ②他人の情緒や要求に関心をもち，自分にできる範囲で助けることができる。 ③みんなにサービスを提供する人を尊重し，彼らの労働成果を大切にする。 ④自分の生き方や習慣と異なる人を受け入れ，尊重する。

（『３～６岁儿童学习与发展指南』より宮本翻訳作成）

表３　「社会適応」の目標

３～４歳	４～５歳	５～６歳
目標１　集団生活を好み適応する		
①集団活動に興味をもつ。 ②幼児園の生活に興味をもち，幼児園を好む。	①集団活動に積極的に参加したい。 ②保護者と一緒に地域コミュニティにおける集団活動に参加したいと思う。	①集団活動を積極的に楽しむ。 ②小学校の生活に興味と憧れをもつ。
目標２　基本的な行為規範を守る		
①注意の下，遊びや公共の場のルールを守ることができる。 ②許可されないと他人のものを取ってはいけないことや，借りた物は返す必要があることを知る。 ③大人の注意の下，おもちゃや他の物を大切にする。	①ルールの意義を感じ，基本的なルールを守ることができる。 ②他人の物を勝手に取らない。 ③うそをつくのが正しくないと知る。 ④引き受けた仕事は努力して完成させなければならないと知る。 ⑤注意の下，食糧，水と電気などを節約することができる。	①ルールの意味を理解し，仲間と相談しながら遊びや活動のルールを作ることができる。 ②物を大切にし，他人の物を使うときも大切にすることを知る。 ③間違ったことをしたら，過ちを認め，嘘をつかない。 ④自分が受けた仕事を真剣に責任を持って遂行することができる。 ⑤身近な環境を大切にして，資源の節約に注意する。
目標３　初歩的な帰属感をもつ		
①自分と一緒に暮らしている家族と自分との関係を知り，家族の一員だと実感する。 ②家庭生活の温かさを感じられ，親を愛し，年上を信頼することができる。 ③自分の家がある通りや地区の名称を言うことができる。 ④国旗や国歌を知る。	①自分がいる幼児園やクラスが好きで，積極的に集団活動に参加する。 ②自分の家の所在地の省，市，県(区)の名称を言うことができる。郷土の代表的な物産と景観を知る。 ③自分が中国人であることを知る。 ④国歌を演奏するとき，国旗を掲揚するときは，自ら起立できる。	①集団に貢献したいと思い，集団の成績を喜ぶ。 ②故郷の発展や変化を感じることができて，またこれを嬉しく感じる。 ③自分の民族を知り，中国は多民族のある大家族であることを知り，各民族の間でお互いに尊重し合い，団結と友愛すべきだと知る。 ④国の重大な業績を知り，祖国を愛し，自分が中国人であることを誇りに思う。

（『３～６岁儿童学习与发展指南』より宮本翻訳作成）

記されている。

まず，「人と交際したい」という目標では，他の幼児と遊び，活動しようとする態度が記されている。３～４歳では，「①他の幼児と一緒に遊びたいと思う」，「②親しい年上と一緒に活動したいと思う」という二つの項目が，４～５歳では，「①他の幼児と一緒に遊ぶのが好きで，よく一緒に遊ぶ仲間がいる」，「②年上と話すのが好きで，年上に話したいことがある」という二つの項目が，５～６歳では，「①自分の親友がいて，新しい友達を作るのも好きである」「②質問があったら，他人に教えてもらいたい」「③嬉しいことや面白いことがあったら，みんなと分かち合いたい」という三つの項目があげられている。

また，「仲間と仲良くすることができる」という目標では，仲間と遊び，活動するための能力について主に記されている。具体的には，３～４歳では，「①仲間と衝突したとき，大人の勧めに従うことができる」など三つの項目が，４～５歳では，「①自己紹介やおもちゃ交換などの簡単な技能を用いて，仲間との遊びに参加することができる」など五つの項目が，５～６歳では，「①仲間を集めて自分と一緒に遊ぶことができる」など五つの項目があげられている。この「仲間と仲良くすることができる」という

目標では，表題それ自体に「できる」という用語が使用されていることに象徴されるように，各発達期を合わせて十三項目の目標が記されていたが，そのうちの九項目に「できる」という表現が見られる。

さらに，「自尊心，自信，自主的な表現」という目標では，心がけるべき自分の態度や姿勢が主に述べられている。３～４歳では，「①自分の趣味に応じて遊びや他の活動を選ぶことができる」など四つの項目が，４～５歳では，「①自分の考えで遊びや他の活動をすることができる」など四つの項目が，５～６歳では，「①積極的に活動を始めたり，活動中にアイデアを出したり，方法を考えたりすることができる」など五つの項目があげられ，各発達期を合わせた十三項目の目標のうち，三項目に「できる」という表現が見られる。

そして，「他人に関心をもち尊重する」という目標では，他者への理解や思いやりが主に述べられている。３～４歳では，「①年長者の話をよく聞いて，その要求を聞き入れることができる」などの三項目が，４～５歳では，「①自分の要求や考えを丁寧に年上に伝えることができる」などの三項目が，５～６歳では，「①礼儀正しく人と付き合うことができる」などの４項目があげられ，各発達期を合わせた十項目の目標のうち，六項目に「できる」という表現が見られる。

次に，後者の「社会適応」の内容を見てみよう。ここでは，三つの目標が掲げられている。すなわち，「集団生活を好み適応する」，「基本的な行為規範を守る」，「初歩的な帰属感をもつ」である。そのうえ，ここでも，「人間交際」のときと同様に，子どもの発達期が三つに区切られ，三つのそれぞれの目標が小さな三つの発達期毎により具体的に記されている。

まず，「集団生活を好み適応する」という目標では，集団活動に興味を示し，積極的に参加しようとする態度が記されている。具体的には，３～４歳では，「①集団活動に興味をもつ」など二つの項目が，４～５歳では，「集団活動に積極的に参加したい」など二つの項目が，５～６歳では，「①集団活動を積極的に楽しむ」など二つの項目があげられている。しかし，そこには，「できる」という用語は見られなかった。

また，「基本的な行為規範を守る」という目標では，ルールを守り，物を大切にすることが主に記されている。具体的には，３～４歳では，「①注意の下，遊びや公共の場のルールを守ることができる」など三つの項目が，４～５歳では，「①ルールの意義を感じ，基本的なルールを守ることができる」など五つの項目が，５～６歳では，「①ルールの意味を理解し，仲間と相談しながら遊びや活動のルールを作ることができる」など五つの項目があげられ，各発達期を合わせた十三項目の目標のうち，五項目に「できる」という表現が見られる。

さらに，「初歩的な帰属感をもつ」という目標では，家族の一員であると実感し，幼児園やクラスを好み，中国人であることへ誇りももつことが主に記されている。具体的には，３～４歳では，「①自分と一緒に暮らしている家族と自分との関係を知り，家族の一員だと実感する」など四つの項目が，４～５歳では，「①自分がいる幼児園やクラスが好きで，積極的に集団活動に参加する」など四つの項目が，５～６歳では，「①集団に貢献したいと思い，集団の成績を喜ぶ」など四つの項目があげられ，各発達期を合わせた十二項目の目標のうち，五項目に「できる」という表現が見られる[20]。

以上，社会学習の主要な内容となっている「人間交際」と「社会適応」という二つについて詳細に見てきたが，そこでの内容は，「社会」の領域の説明のところで指摘したように，社会性という言葉が，我が国で言えば道徳性に当たるような意味内容も包含している。

まず，「人間交際」の内容のところでも，たとえば「仲間と仲良くすることができる」という目標においては，「②大人の指導のもとで，おもちゃを奪うことなく，独占しない」（３～４歳），「②みんなが好きなものを順番に使ったり，分け合ったりすることができる」（４～５歳），「④他人と自分の考えが，ときには違うことを知り，他人の意見を聞いたり，受け入れたりす

ることができ，納得できないときは，理由を説明できる」（５～６歳）という項目は，道徳的なものである。「自尊心，自信，自主的な表現」という目標においては，「②自分の良い行動や活動の成果を好む」（３～４歳），「③自分のことはできるだけ自分でやり，人に頼るのは遠慮する」（４～５歳）という項目も道徳的なものである。「他人に関心をもち尊重する」という目標では，「③注意の下，他人に迷惑をかけないようにする」（３～４歳），「②他人の情緒に注意し，関心をもち，思いやりを示すことができる」（４～５歳），「①礼儀正しく人と付き合うことができる」（５～６歳）という項目も道徳的なものである。

また，「社会適応」の内容のところでは，「基本的な行為規範を守る」という目標それ自体が，道徳性の育成ということを明確に宣言しているものである。したがって，そこに記される項目は，たとえば「②許可されないと他人のものを取ってはいけないことや，借りた物は返す必要があることを知る」（３～４歳），「③うそをつくのが正しくないと知る」（４～５歳），「⑤身近な環境を大切にして，資源の節約に注意する」（５～６歳）など，道徳的価値の理解以外の何ものでない。「初歩的な帰属感をもつ」という目標においても，「③自分が中国人であることを知る」（４～５歳），「③国の重大な業績を知り，祖国を愛し，自分が中国人であることを誇りに思う」（５～６歳）などという項目も，道徳性を包含するというよりも，明らかに道徳性とほとんど同義である。日本の言い方をすれば，その項目は，「国を愛する態度」という道徳的価値そのものである。

したがって，「人間交際」と「社会適応」という内容においても，中国でいう社会性は，道徳性に当たるような意味内容を強くもっていたと確認できた。

また，「人間交際」と「社会適応」において記述されたものは，できるかぎり具体的・実際的な行動を意図していた。さらに言えば，発達段階も小さく区切られ，それに対応させようとした行動が示されていた。特に，目標にかかわって「できる」という用語が頻繁に使われていたことは注目に値する。つまり，「できる」という到達目標が明確に示されようとしていたと考えられる。

もちろん，それだけに，その到達目標がその発達段階の子どもにとって適切ではないと思われるところも明確に見られた。たとえば，「人間交際」のところの「自尊心，自信，自主的な表現」という目標において，「②自分の優れている点と長所を知り，それについて満足する」（４～５歳）という項目が記されているが，そのような目標は，そのような子どもの年齢において可能なのか，と考えると，はなはだ疑問である。また，「社会適応」のところの「基本的な行為規範を守る」という目標において，「⑤身近な環境を大切にして，資源の節約に注意する」（５～６歳）という項目も同様に，行動する以前に，そのような目標を自覚できるだけの知識と経験がその年齢の子どもにおいてすでに備わっているのか，という疑問も禁じ得ない。

しかし，できるかぎり具体的・実際的な行動を到達目標的に示そうとしている点，端的に言えば，「見える化」を道徳の指導方法とかかわって目指している点は，目指す方向としては決して間違っていないと考えられる。

Ⅳ．『指南』における道徳性の育成

ここでは，日本の『幼稚園教育要領』と対比しながら，『指南』における道徳性の育成について検討する。

前述したように，中国の『指南』では，「社会」領域の教育目標として，人との交際，自尊心，他人の尊重，集団生活への適応，基本的な規範を守る，帰属感などが示されていた。また，『指南』における「社会」領域の全体的な説明では，幼児は自らの社会性を中心として人格が形成されることや，周囲の文化や環境を通じて自然に社会性を発達させていくことが述べられていた。ここで言うところの，つまり中国で使用される社会性という用語それ自体が，明らかに日本で言うところの道徳性とかなり重なる意味で使用されている。

それに対して，日本の『幼稚園教育要領』を眺めてみると，「人間関係」の領域では，「他の人々と親しみ,支え合って生活するために,自立心を育て,人と関わる力を養う」と一文が見られる[21]。しかしこの説明では，「人との関わりを通じて，他の人々と生活する能力が養われる」という発想とは逆転している。さらには，「人と関わる力」とは具体的にどのような力なのかについても，説明されていない。『指南』によれば，「幼児は，大人や仲間と付き合っているうちに，相手との友好的な付き合いを学ぶだけではなく，自分を認識することや，他人に応対することも学び，社会生活に適応する能力を発達させていく」とあるように，人との関わりによって，自己認識や他人との応対といった，現実社会で生きていくための能力が発達すると捉えられている。この点から言えば，現実社会における人間の活動を通して、日本で言うところの道徳性を含めた社会性を育成しようとする中国の観点は，気持ちや心情に執着した内的な道徳性の育成を目指しがちな日本の道徳教育の状況に対して，有益な示唆を与えてくれると考えられる。

また，それだけでなく，もう一つ注目すべき点が『指南』において見られる。すなわち，「みえる化」を目指す形で社会性の育成、つまり道徳性の育成が実施されようとしている点であろう。

『指南』における「社会」の領域では，目標にかかわって「できる」という用語が頻繁に使われていた。つまり，「ことができる」という到達目標が明確に示されていたのである。この点は，注目すべき点であろう。

たとえば「人間交際」の内容では，「仲間との遊びに参加したいときは，友好的に頼むことができる」，「自己紹介やおもちゃ交換などの簡単な技能を用いて，仲間との遊びに参加することができる」，「仲間を集めて自分と一緒に遊ぶことができる」といった目標が掲げられていた。また，「社会適応」の内容においても，「注意の下，遊びや公共の場のルールを守ることができる」，「ルールの意義を感じ，基本的なルールを守ることができる」，「ルールの意味を理解し，仲間と相談しながら遊びや活動のルールを作ることができる」といった目標が掲げられている。

一方で，日本の『幼稚園教育要領』における「人間関係」の領域を見てみると，「1　ねらい」や「2　内容」のどちらにも，「～できる」といった表現で到達目標が明確には示されていないのである[22]。より詳細にいえば，「1　ねらい」では，「(1) 幼稚園生活を楽しみ,自分の力で行動することの充実感を味わう」，「(2) 身近な人と親しみ,関わりを深め,工夫したり,協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい,愛情や信頼感をもつ」，「(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける」の三つが示されている。しかし，年齢が異なる幼児に対して，それぞれの発達の段階を十分に踏まえていないわけではないが，ただ単に充実感や活動する楽しさを味わい，愛情や信頼感をもつことに留まっているのは，十分な教育目標を設定しているとは言い難い。つまり，そこでは，子どもの内面を重視する心理主義的な傾向が未だ強く，「見える化」の実現可能性が弱いままである。

もちろん，個々の幼児の発達の段階は一様ではないために，『指南』で示された教育目標が実際に妥当であるかについては，前述したように疑問点は少なからず存在しており，議論の余地は大いに残っている。とはいえ，幼児の具体的・実際的な行為に対しても，年齢を詳細に明示しながら，発達の各段階に応じるかたちで，「見える化」の方向を目指して，「～できる」という到達目標を設定し，彼らの能力を最大限に伸ばそうとする発想は，日本の幼児教育にとって，あるいは幼児期における道徳性の育成にとっても，積極的に学ぶべき点ではないだろうか。

V．おわりに

本稿では，『指南』に注目し，その中の「社会」の領域を中心に考察した。その結果，中国の道徳教育では，社会活動を通して，道徳性を包含した社会性の育成が目指されていたことが確認できた。また，幼児の発達の段階を考慮しなが

ら具体的な到達目標を設定し，「～できる」という形式で社会の中で活用できる能力を育成しようとしていることも明らかになった。

なお，これらの結論は，『指南』という幼児教育のガイドラインの中で確認できたものである。今後は，実際の幼児園において『指南』で示された内容を踏まえて，どのような教材・教具を開発して，どのような環境で子どもにどのように働きかけているかについて、中国における追跡調査を行いたいと考えている。

注

（1）泉千勢「序章　世界の保育の質改革の動向―21世紀型保育へのチャレンジ―」泉千勢編『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか―子どもの豊かな育ちを保障するために―』ミネルヴァ書房，2017年，6頁。

（2）五つの内容領域とは，「健康」，「人間関係」，「環境」，「言葉」，「表現」である。

（3）文部科学省『幼稚園教育要領』2017年，14頁。なお，このような文章は，『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』においても，ほとんど同じ内容となっている。（https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_2.pdf,2020.2.10）

（4）同上，14頁。なお，このような文章も，『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』において，ほとんど同じ内容となっている。

（5）もちろん，基本的な考え方は抜本的に変更されていない。しかし，まったく進展がないわけではない。近年，幼稚園教育要領の改訂に向けて出された「幼児教育部会における取りまとめ（案）」（2016年）において，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として十項目があげられており，その中の一つに「道徳性・規範意識の芽生え」が記されている。

（6）一見真理子「全人民の資質を高める基礎『早期の教育』―競争力と公平性の確保―」泉千勢，一見真理子，汐見稔幸編『未来への学力と日本の教育９　世界の幼児教育・保育改革と学力』明石書店，2014年，216頁。

（7）中国法制出版社编『中华人民共和国教育法律法规全书』中国法制出版社，2018年，174頁。

（8）姜烨瑶『改革開放三十年学前教育政策嬗变研究』東北师范大学修士論文，2013年，27頁。なお，「幼児園教育指導綱要（試行）」における「社会」の領域では，①自信をもち，主体的に活動に参加することができる，②人との交流を楽しみ，思いやりの心をもって，互いに助け合い，協力し，分かち合うことを学ぶ，③日常生活において守るべき基本的な社会の規則を理解する，④できることに一生懸命取り組み，困難を恐れず，責任感の初歩を有する，⑤父母や年長者，先生や仲間を愛し，集団を愛し，故郷を愛し，祖国を愛する，といった五つの目標が示されている。

（9）国務院法制弁公室編『中華人民共和国教育法典』中国法制出版社，2018年，72，119頁。

（10）南部広孝，桑原綾「文革後中国における幼児園教育の変容―『幼児園工作規程』を手がかりに―」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第63号，2017年，469-470頁。

（11）范国睿主編『教育政策辞典』华东师范大学出版社，2017年，378頁。

（12）孟宁「在《３－６岁儿童学习与发展指南》国家培训者培训班上的讲话」『学前教育研究』2012年，８頁。

（13）UNISEF CHINA (2017) EARLY CHILDWOODDEVELOPMENT: 3-6YEARS.（https://www.unicef.cn/media/10186/file/EARLY%20CHILDHOOD%20DEVELOPMENT%203-6%20YEARS.pdf, 2020. 2.10）

（14）王迎兰「幼儿园教师培养与培训的科学规则：基于在实践中落实《３～６岁儿童学习与发展指南》的思考」『学前教育研究』2014年，58-60頁。

（15）一見真理子，日暮トモ子「中国の幼児教育ガイドライン」4-6頁。なお，一見らによれば「中国では，０歳～義務教育就学年齢（満6歳）までの教育を『学前教育（就学前教育）』，３～６歳までの教育を『幼児教育，幼児園教育』と呼ぶ。３歳未満児の教育については幼児期の初期段階という意味で『早期教育』と称すこともある」という。また「中国の就学前教育は，目下無償化も義務

化もなされていない」。
（http://jsrec.or.jp/wp-content/uploads/2019/06/2.中国.pdf,2020. 2 .10）

(16) 中华人民共和国教育部『3～6岁儿童学习与发展指南』首都师范大学出版社，1－3頁。

(17) ここにおける「早期教育」は，原文では「超前教育」と記されている。姜英杰は「超前教育」について「子どもの通常の発達規則を超えて，後に学習する物事について早期教育をすること」とし，例えば「3～6歳の子どもに小学校の課程を教えること」と説明している（姜英杰「非理性的超前教育―关于早期教育科学性的思考―」『东北师范大学报（哲学社会科学版）』2008年，9頁）。

(18) このほかの領域について言及すると，「健康」については，幼児の心身の発達や生活能力が，次の通りに説明されている。

「健康とは，人の身体的，精神的，社会的に良好な状態を指す。幼少期は，幼児の身体および機能の発達が非常に速い時期であり，安心感と楽観的な態度を形成する重要な時期でもある。良好に発育した体，明るい情緒，強健な体格，協調的動作，良好な生活習慣，基本的な生活能力は，幼児の心身の健康の重要な指標であり，他の分野での学習と発展の基盤でもある。

幼児の身体的および精神的健康の発達を効果的に促進するために，大人は幼児に合理的でバランスの取れた栄養を提供し，十分な睡眠と適切な運動を保証し，幼児の成長と発達の需要を満たすべきである。また，温かい対人間環境を作り，幼児が愛情と愛を完全に感じ，肯定的で安定した情緒を形成できるようにする。さらに，幼児が良い生活と衛生習慣を身に付け，自分自身を守る能力を向上させ，生活に役立つ生活能力と文明的な生活方式を形成するよう援助する。

幼児の心身の発育は未成熟であり，大人の注意深いケアを必要としている。しかし，過度の保護や手出しによって，幼児の自主的な学びの機会を奪い，過剰に依存しすぎる悪い習慣を身につけさせ，自主性と独立性の発達に影響を及ぼしてはならない。」

「言語」については，幼児の言語能力が次の通りに説明されている。

「言語は交流と思考のためのツールである。幼児期は言語発達，特に口頭言語発達の重要な時期である。幼児の言語の発達は様々な領域に関わっており，他の分野の学習と発達にも重要な影響を与える。幼児は言語を用いて交流しながら，人と交流する能力，他人を理解し交際状況を判断する能力，自分の思考を組織する能力も発達させている。言語を通じて情報を得ることにより，幼児の学習は徐々に個人の直感を上回っていく。

幼児の言語能力は，交流し使用する過程で発達していく。幼児のために自由でリラックスした言語の交流環境を作成し，幼児が大人や仲間を交流するよう支援し，幼児が話したいと思い，話すことを楽しみ，積極的な反応を得られるようにする。豊かで適切な幼児向けの読み物を提供し，いつも幼児と一緒に本を読み，お話をして，豊富な言語の表現能力を高め，読書への興味と良い読書習慣を養い，さらに学習経験を広げていく。

幼児の言語学習には，対応する社会経験の支援が必要である。様々な活動を通じて，幼児の生活経験は発展し，言語の内容は豊かになり，理解と表現能力は強化される。生活環境と読書活動では，幼児は自然に言葉へ興味を抱くよう導かれるべきであり，機械的な記憶や訓練を強化するやり方は，幼児にとって時期尚早であり，幼児の学習の特徴と受容する能力に適していない。」

「科学」については，論理的思考と探求能力が，次のように説明されている。

「幼児の科学的な学習は，具体的な物事を探求し，実際の問題を解決しながら，物事の共通点と相違点，関連を発見しようとする過程である。自然の物事の探求と，実際の生活問題を解決するために数学を使用する過程において，幼児は豊かな感性の経験を獲得し，具体的な思考を完全に発達させるだけでなく，分類，配列，判断，推論を試みようとする。

このことは，他領域における深い学習の基礎となる，論理的な思考力を次第に発達させていく。

幼児の科学的な学習の核心は，探究への関心を刺激し，探求のプロセスを経験し，予備的な探求能力を開発することである。大人は，幼児の好奇心を発見して保護し，自然で実際的な生活の機会を十分に活用し，観察，比較，操作，実験を通じて問題を見つけ，分析し，解決することを学ぶために幼児を導く。幼児が経験を継続して蓄積するよう援助し，新しい学習活動に基づき，生涯学習の態度と能力を形成させる。

幼児の思考の特徴は，主に具体的な思考に基づいている。幼児は，直接的な知覚，個人的な経験，実際の操作を通じて科学を学習するよう導くことに注意する。幼児への訓練や教え込みによって，知識と技能の獲得を追求してはならない。」

「芸術」では想像力と創造性が，次のように説明されている。

「芸術は，人間が美しさを感じ，美しさを表現し，美しさを生み出すための重要な形態であり，周囲の世界に対する認識と感情的な態度を表現するユニークな方法でもある。

すべての幼児には，心に美しさの種がある。幼児の芸術領域の鍵は，創造する条件と機会を十分に満たし，自然と社会生活において幼児の美の感情と経験を発芽させ，想像力と創造性を豊かにし，幼児が心から美を感じ，発見することを学び，自分の方法で美を表現し，創造するよう導くことである。

幼い幼児の物事に対する感情や理解は大人と異なり，また，自分の理解や感情を表現する方法も大人とは異なる。幼児の独特なタッチ，動き，言語には，豊かな想像力と感情が含まれていることがよくある。大人は幼児の芸術的な表現を完全に理解し，尊重する必要がある。自分の審美基準で幼児を評価したり，ましてや一律の訓練によって「完璧」な結果を追求したりすることで，想像力と創造性の萌芽を潰してはならない。」

以上四つの領域における道徳性の育成についての検討は，稿を改めて論述したい。

(19) 前掲『3～6岁儿童学习与发展指南』29-30, 32, 34, 36-37, 39頁。

(20)「②故郷の発展や変化を感じることができて，またこれを嬉しく感じる」(5～6歳) を「～できる」という表現として数えている。

(21) 前掲『幼稚園教育要領』，13頁。

(22) 同上，13頁。

参考文献一覧（引用文献を含む）

1．中国における教育政策に関する参考文献

・泉千勢編『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか―子どもの豊かな育ちを保障するために―』ミネルヴァ書房，2017年。

・泉千勢，一見真理子，汐見稔幸編『未来への学力と日本の教育 9　世界の幼児教育・保育改革と学力』明石書店，2014年。

・南部広孝，桑原綾「文革後中国における幼児園教育の変容―『幼児園工作規程』を手がかりに―」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第63号，2017年，469-470頁。

・文部科学省『諸外国の初等中等教育』明石書店，2016年。

・范国睿主編『教育政策辞典』华东师范大学出版社，2017年。

・国務院法制弁公室編『中華人民共和国教育法典』中国法制出版社，2018年。

・中国法制出版社编『中华人民共和国教育法律法规全书』中国法制出版社，2018年。

2．中国における道徳教育に関する参考文献

・陈爱华「践行《3－6岁儿童学习与发展指南》的新思考」『新课程研究』2019年，102-103頁。

・孟宁「在《3－6岁儿童学习与发展指南》国家培训者培训班上的讲话」『学前教育研究』2012年，8-9頁。

・檀传宝『学校道德教育原理』第3版，教育科学出版社，2017年。

・檀传宝『德育原理』第3版，北京師範大学出版社，2017年。

・檀穿宝『走向德育专业化：学校德育100问』华

东师范大学出版社，2011年。
・王迎兰「幼儿园教师培养与培训的科学规则：基于在实践中落实《３～６岁儿童学习与发展指南》的思考」『学前教育研究』2014年，58-60頁。
・张晓东「中小学德育政策变迁与价值分析」『中国德育』2015年，38-41頁。

３．中国における就学前教育に関する参考文献

・一見真理子，日暮トモ子「中国の幼児教育　ガイドライン」1-7頁。(http://jsrec.or.jp/wp-content/uploads/2019/06/2.中国.pdf,2020. 2 .10)
・蔡迎旗『幼儿教育财政投入与政策』教育科学出版社，2007年。
・爾寛明「中国における幼稚園教育の現状と幼稚園教諭養成について」『桜美林論考.教職研究』2019年，23-37頁。
・华灵燕编『学前教育政策与法规』北京大学出版社，2015年。
・姜烨瑶『改革開放三十年学前教育政策嬗变研究』東北师范大学修士論文，2013年。
・姜英杰「非理性的超前教育—关于早期教育科学性的思考—」『东北师范大学报（哲学社会科学版)』2008年，９-14頁。
・幸福新童年编写组编『《3～6岁儿童学习与发展指南》解读』人民教育出版社，2013年。
・姚慧「幼儿园课程能力建设的内涵与路径探索—基于《3～6岁儿童学习与发展指南》对幼儿园课程的要求—」『上海教育科研』2015年，90-94頁。
・中公教育教师资格考试研究院編著『国家教师资格考试专用教材 综合素质・幼儿园』世界图书出版公司北京公司，2018年。
・中公教育教师资格考试研究院編著『国家教师资格考试专用教材 保教知识与能力』世界图书出版公司北京公司，2018年。

４．テーマ設定に関する参考文献

・厚生労働省『保育所保育指針』2017年。(https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf,2020.2.10)
・内閣府，文部科学省，厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』2018年。(https://www8.cao.go.jp/shoushi/kodomoen/pdf/youryou_kaisetsu.pdf,2020. 2 .10)
・文部科学省『幼稚園教育要領』2017年。(https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_2.pdf,2020.2.10)

Moral development in “Early Learning Development Guidelines for 3-6 years”: Focusing on the reform in the preschool education in China

Kei MIYAMOTO
Yixuan SONG
Wakana KAWAKAMI
Takeo YOSHIDA

In this paper, as a basic study in the preschool education in China, we clarify the moral development in “Early Learning Development Guidelines for 3-6 years,” which are guidelines for the preschool education.

The “Early Learning Development Guidelines for 3-6 years” are established to provide scientific care and education in kindergartens and homes and to promote the full and harmonious development of infants' minds and bodies. In addition, when we examine "society," which is most closely related to the moral development, the content is composed of "human relations" and "social adaptation." The goals of "human relations" are to develop the attitude and the ability to play and work with other infants. The goals of "social adaptation" are to participate in group life, observe the rules, and have attachments to family members and kindergartens.

Furthermore, we examine the characteristics of guidelines, in comparison with "Course of study for Kindergarten" in Japan. As a result, the following two points were revealed. First, in China, it is aimed to develop sociality including morality. Second, in China, the concrete goals to be achieved are defined considering infants’ developmental stage, and it is aimed to develop ability, which can be used in the society.